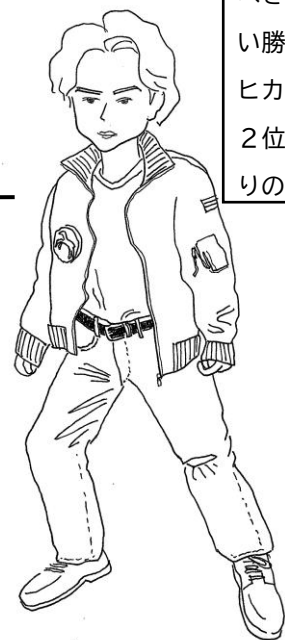


■入れるべきか、出すべきか■運任せではない勝ち方とは■宇多田ヒカル「Automatic」が2位だった訳■本づくりの楽しさを知る

入れるべきか、出すべきか、

それが問題だ



菅田将暉

『Tシャツの日本史』というタイトルに引かれるものを感じ、手に取った。確かに本書以前にTシャツに関する通史は読んだ覚えはない（様々なTシャツをビジュアルで見せる本は多数あるのだが）。そして「歴史」ではなく「日本史」ってところがミソだろう。Tシャツの裾は入れるのが正解か、出すのが正解か？という、他の国の人たちからすれば「好きに着ればいいじゃん」で済む話が、時代時代で流行に乗り遅れまいと、同調圧を感じ続けてきた日本人の悲しい性の歴史が綴られるのだった。

五十年も生きていると、ファッションは流転するだけでなく輪廻してくるということが実感としてわかってくる。アイテムだったりサイズ感だったり、着こなしだったり。アラレちゃん眼鏡、ハイウエスト、ケミカルウオッシュ、全体にオーバースイズなどなど、ある時期には野暮ったく思えたものが、いつの間にか蘇っていたりする。肩パッドやソフツーツやボデイコンシヤスな

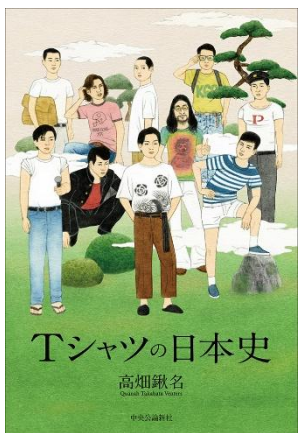
服たちも、草葉の陰から復活の時を窺っているのかもしれない（ゾンビか！）。

本書によれば九〇年代前半は渋谷が一般に浸透した時代。誰もがTシャツの裾を出し始めた。漫画の世界ですら主人公が連載途中から裾を出すという事態が出現（『SLAM DUNK』に関する考察は秀逸）。時は流れ二〇〇四年、一冊の本が刊行され翌年映像化。『電車男』である。主人公はTシャツの裾をインしている。所謂「オタクファッション」だ。当時の大半の日本人がこれをダサイと感じた二〇〇五年を本書では裾出し同調圧のピークとしている。再び時は流れ二〇一〇年代半ば。鋭敏な若者は裾を入れ始めた。「あえて野暮なファッションを選び取る」ことで「時代を支配していた同調圧力（筆者註：裾を出すこと）に風穴をあけた」のだ。その後「裾を入れることが制服化」していき、二〇年代のタックインの流行があると本書は見

先の鋭敏な若者の代表格が菅田将暉。確かに裾をインしているイメージがある菅田には、二〇一七〜二一年の五年間のスナップと撮り下ろし計二四〇のコーディネートを集めた『着服史』という一冊がある。が、最初の一枚こそTシャツをインしているが、すべてのコーデで入れているわけではない。あたりまえだが、ルールに縛られたファッション程つまらないものはない。服への愛と自由な発想。菅田の楽しそうな表情を見よ、と言いたくなる。

『Tシャツの日本史』が日本人を呪縛から解き放ってくれるのか？そして、五〇年後の日本人はTシャツの裾を入れているのか、出しているのか？はたまた…。

浪



肯定でもなく、

否定でもなく

タイトル『医者にオカルトを止められた男』にあるオカルトの意味、きちんと日本語で的確に説明できるかといえばできません。今回改めて調べてみました。「神秘的、超自然的な事象や知識、技術などのこと、心霊現象や怪談、UFO、超能力、都市伝説など非科学的とされる現象全般を含む言葉として使われる」とあります。私は子供のころからこういったものにはロマンを感じつつも信じてはいけない胡散臭いものという目で見ていました。

著者の大槻ケンヂ・通称オーケンは心身のバランスを崩していた時期、オカルトへの興味が唯一の心のよりどころであったが「体調回復のため」オカルトを止めてもらなさいと医師から言われるとあります。なんだか意味の分からないタイトルだと思ひ手に取りました。

この人は本当にオカルトが好きで、いろいろ知識があり、その上表現が面白い人であることが良くわかります。オーケンは私と同年代なので子供のころに話題となつた口裂け女や五島勉のノストラダムスの大予言、ユリゲラーのあたりの話はそういえばあったなと

懐かしく感じます。

オーケンのオカルトに対する見解は肯定でもなく否定でもなく、面白がるというののもとても良いと思います。ミュージシャンの本だけどオカルトについて語るクッスツと笑えるエッセイです。

京



大槻ケンヂ

食べたら

終わり

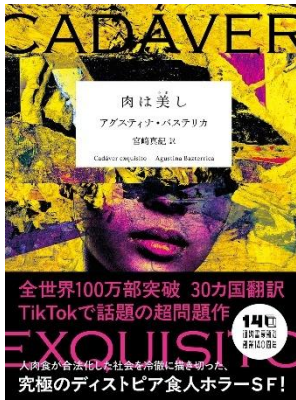
サブカルチャーという言葉が流行っていた一九八〇年代は切り株映画の時代であった。人間を横に切った断面が、切り株に似ているためだ。当時のホラー映画はグロければグロいほど喜ばれたわけだ。八〇年代のホラー小説を牽引した作家と言え、友成純一がいる。『狂鬼降臨』は突如、現れた鬼により地上が阿鼻叫喚の地獄となる様子を描く。スプラッタ描写は

ジャック・ケッチャムやソローキン『ロマン』のうえをゆく。読者を選ぶ作品だが、人間を徹底的に相対化させた悪逆文学の至宝である。『狂鬼降臨』では食欲を覚えた鬼により、公共施設は人間ブローラー工場となる。同様にヒトが食糧となるディストピアを描くのが『肉は美し』だ。動物感染症のパンデミックが起こり、畜肉が食べられなくなった世界では、人肉食が横行する。食糧としてのヒトの飼育・繁殖・屠畜・加工が合法化された出来事を〈移行〉と呼び、食糧のために家畜化されたヒトを〈頭〉と呼ぶ。〈頭〉を人間扱いすることは非合法であるにもかかわらず、主人公はそれをはじめてしま…。

著者はブエノスアイレス出身。アルゼンチンでは国民一人あたり年間四十五キロほどの牛肉を食べるそうで、牛が食べられなくなれば、主食がなくなる事態になる国だということも、この設定に関係ある。そして、タイトルの「美し(うまし)」「美味しい」は当然として、なぜ「美しい」のか。

食人はタブーであるがために、文学・芸術のなかで描かれ続てきた。『羊たちの沈黙』におけるハンニバル・レクターやダリ「我が子を食らうサトルヌス」は有名だ。本書は八〇年代の名作映画「食人族」のようなグロ味はないが、連綿と紡がれてきたカニバリズム文化

の代表作だ。令和になってもヒトは美し。



## 運まかせではない

### 勝ち方とは

世界的なトレーディングカードゲーム(TCG)に「マジックザギャザリング」というものがある。『カードゲームで本当に強くなる考え方』は、世界で二千万人以上のプレイヤーがいるといわれるこのゲームで、世界トップリーグで活躍していた元プロプレイヤーによる強くなるための指南書。

ゲームの攻略本ではなく、カードゲーム全般に通じる普遍的な考え方、取り組み方について著者が培った論理的、心理的な要素を多く詰め込んだ内容になっている。

個人スポーツ競技や投資の世界などで言われる「勝者のゲーム」「敗者のゲーム」の考え方は、TCGでも当てはまり、相手のミスを待つ方法ではなく、積極的に勝ち筋を生み出す

姿勢が上達するための大切な要素であるようです。

私自身同じようなTCGをプレイしていた時期がありましたが、運が良ければ勝ち、負ければ運が悪かった、何回かやれば勝てることもあるだろう、ぐらいの典型的なダメな考え方でした。TCGに限らず「物事に本気で取り組む」ために必要な知見が得られる内容になっているため、一度手に取ってほしい一冊です。

景

## やさしく

### 魔法紹介

今「魔法」をイメージするのならどのような形だろうか。あるいはどんな術だろうか。

「指輪物語」の中つ国では、限られた賢者のみが扱える秘術だし、「ハリーポッター」の魔法界なら、大勢いる魔法使いたちの便利な技術である。魔法少女の変身や、あるいは「ドラゴンクエスト」の呪文のように各々の文化のアイコンかもしれない。

それらは架空のファンタジーだがそれでも時折、現実には人物たちと出来事が物語に関わってくることも少なくない。アレキスター・クロウリーやコル

ネリウス・アグリッパ、賢者の石にタリスマン、何となく聞いたことのある単語であつてもよくは知らない：説明を求められても回答は難しい…。

『本当にあつた魔法図鑑』、本書では実際にいた、あつたとされる魔法使い・呪文・儀式をイラストを交えて分かりやすく紹介している。児童書なので漢字にルビが振つてあり小さな読者に優しい。

ただし、巻末にも注意書きがあるくらいでとにかく魔法や錬金術が実在した体で進行する。

何でも信じる小さな読者には、大きな読者からさりげなく「エネルギーの保存則」など伝えてもいいのかもしれない。

近



## ふしぎな世界を手元に

世界中の人々が映画「ハリーポッターと賢者の石」を通じ魔法使いの世界を覗き込んでから二〇二六年で二十五周年を迎える。従来の「魔法使い」「魔法」のイメージとは異

なる、魔法世界と英国の現実世界が合体した創造の世界に没頭した人は多いはず。にゅーとと伸びる階段や、もの言う肖像画、噛みつく本、組み分け帽子といった不思議な道具たちも魔法世界の魅力のひとつだろう。

そんなファンタジーな世界観を自分で作り出す幻想クラフトシリーズに新作が登場した。今回は「魔法の筆記具」がテーマとなっている。魔法陣が浮かびあがる魔導書や魔力が宿るインク壺など、ふしぎな世界が広がる道具たちを身近なものを使って作成する方法を紹介。

人気クラフト作家が参加した作品の数々は、眺めているだけでも不思議な世界を堪能できるが、レジンを使った独特な色・透明感を使つて、ハリーポッターの世界のように、現実世界の中に自分だけの魔法世界を作ってみてはいかがだろう。

杉



## 昭和が恋しい

ページをめくれば思わず口ずさみたくなる、あの旋律。

帯のキャッチコピーに惹かれて手にしたのが今回ご紹介する『昭和歌



謡、イイネ!」

著者と同年代ということもあり、どの曲も懐かしく、読み進めながら、頭の中では旋律を奏でるという、まさに心躍る読み心地。一曲一曲、その曲にまつわるエピソードや蘊蓄も楽しく、忘れていた記憶がどんどん甦ってきて、全曲、聴きたくなります。

昭和というSNSなど全くなかった時代。でも、今より心が豊かで自由だったと感じているのは私だけではないでしょう。何となく生き辛くなった令和の時代におススメの一冊です。



## 宇多田ヒカル

「Automatic」が

オリコンランキング

最高位二位だった訳

過去オリコンランキング一位になった曲を調べたことがあります。

CDが一番売れた一九九〇年代は毎週のように一位が入れ替わり、ダブルミリオン級のヒットが次々と生まれた「J-POP黄金期」。今のようにサブスクやSNSもなく、ランキングに入っている曲はみんな知っている、歌えるという曲ばかり。しかし年代を代表する誰もが知っている曲であつても一位に届かなかった楽曲があります。発売初週に五十万枚以上売れた曲や、累計ミリオンを記録しながらもウィークリーランキングでは一位を獲れなかった曲も。

そこに注目したのが『なぜあの名曲は「2位」だったのか』です。著者によれば九〇年代に最高位は二位という曲は一九五曲あるということです。同日リリースされた曲、発売タイミング、プロモーション手法など、そこにはさまざまな理由があります。アーティストにとってそれは屈辱だったのか、それとも勲章だったのか。その背景を丁寧に追うことで、九〇年代特有のブームやメディア戦略、アーティストや楽曲そのものの力がどのようにヒットの構造を形作ったのかが見えてきます。

読んでいると頭の中で懐かしいメロディが自然と流れ始めます。読み終える頃にはカラオケで「この曲って最高順位二位だったんだ」とちよつと語りたくなってしまうでしょう。九十年代J-POPを愛する

人にとって、懐かしさと発見が同時に訪れる一冊です。

野



## 多様性の笑い



濱田祐太郎

まさか、「お前、見えてるやろ!」という視覚障害者に対する共演者からの「へいじり」が成立する時代が来るとは・・・。先天性の視覚障害があるピン芸人、濱田祐太郎の自伝的エッセイ『迷ったら笑つていってください』は、彼の舞台上での「つかみ」がタイトルになっています。

白杖を持ち、スーツ姿で、自身の視覚障害に関する実体験や日常の出来事を面白おかしく語るといふ漫談スタイルの芸風。「盲学校ある

ある」や「視覚障害者あるある」などを、独自の視点で笑いに変化させます。「目が見えている」観客にも分かりやすく伝わるほど練りこまれた話芸。本当のことしか話さないという個性的なスタイル(※芸人のネタは、話を作ることや盛ることが多い)も、うまく嵌まったのでしょう。かつてはカジュアルな服装でマイクの前に立っていたらしいですが、今はスーツ姿が様になっていてカッコいいです。

ピン芸人の一番を決める大会で優勝したほどの実力者ですが、過去には目が見えないことを理由に落とされた経験があり、ある審査員からは、「劇場支配人が「盲目の芸人は使にくい」と言っている」というようなニュアンスのことを言われたこともあるそうです。障害に対する無理解から不遇に扱った人たちへの不信感やひねくれた思いはあるのでしょうか、本書を通して感じるのは、サポートしてくれる周囲への感謝と、実績のある先輩芸人たちへのリスペクトです。ほっこりした気持ちで読めるエッセイになっています。

濱田さんは自身を「障害者を代表しているつもりはない」と語りますが、障害者がこれまでバラエティの世界に出てこれなかったことを業界の怠慢と断じています。障害者であろうと健常者であろうと、彼に影響を受けてお笑い界を目指す人

が一人でも増えたら面白いなと思わずにいられません。

免

## ひと粒で

二度おいしい

『につぼんのおかし』には、イラストレーターである内田有美さんの、色鉛筆やアクリル絵具で描かれた本物そっくりの独特な絵と、次頁にはロングセラーお菓子の歴史や開発秘話とその英訳が載っています。

紹介されているほぼすべてのお菓子が、子供のころからつい最近まで食べたことのあるお菓子だな、と思いつながる手が止まりませんでした。

ひとつ気付いてしまったのは、自分の好きな食べたことのあるお菓子の日本語の解説を読んで、隣の英訳を読むと、いつもより英語の意味がすんなりわかりやすかったということです。知っているお菓子ばかりなので想像しやすいためか、日本語なしで理解できるものもありました。

よろしかったら、騙されたと思って、お試しください。同じ著者の絵本『おせち』もオススメです。

免

# 富山のアニメ制作会社

## ピーエーワークスを知りたいならこれを読もう！

富山が拠点のアニメ制作会社ピーエーワークス。その作品を観たことがある人にとっては気になる本ではないだろうか。『未来を照らす、灯りをつくる。』という二十五年の歴史を語る書籍が発行された。

最初のページに「ピーエーワークスのあゆみ」という年表がある。私自身はコミック担当で、アニメは観てきた方だと思うので懐かしさを感じつつ、こんなに制作されてきたのかという驚きも感じた。

いない、あからさまに聖地巡礼を狙おうということはないと断言されていたところが印象に残った。経営上における問題が赤裸々に綴られていることも驚いた。あまり聞いたことがない話だと思ってい

作品を追いかけていきたいと思える一冊だった。一方で、未知の業種のビジネス書を読んでいる感覚も味わえるので、アニメは全く観ないという方にもおすすめしたい。

林

## 本づくりの

## 楽しさを知る

二〇二五年七月、能登最北端の地で印刷業を営んでいたスズトウシヤドウ印刷が事業を終了するとの知らせが飛び込んできた。「スズさん」の愛称で親しまれていた同社は、約四十年に渡り同人誌の印刷・製本を手掛けてきた北陸唯一の同人誌印刷会社だ。震災以降、スズさんが日々の状況をSNSで発信すると、全国のファンや同士から多くの応援メッセージが届き、その一つに丁寧な返事をしている姿が印象的だった。その様子からは、発注者と受注者を超え「本をつくる」という同じ目的を持った仲間の絆が見て取れた。

そのことが心に残っていたこともあり、本づくりに携わる人々の歩みを記した本書を手にとった。『本が生まれるいちばん側で』は、長野県松本市で印刷業を営む藤原印刷の三代目である兄とその弟が本づくりに向けた熱い想いを綴った一冊だ。かつては教科書や専門書を中心に黒子として働いていた藤原印刷が、個人の「自分で本をつくりたい」という気持ちに応え、伴走し続けた十五年の軌跡が書かれている。個人製作の本と一言で言っても内容も依

頼者の要望も多種多様。思い出のワンピースを切り刻んで一枚ずつ丁寧に表紙に貼って完成させたアートブック、家業の自動車工場で働く父の姿を残したいと娘さんが限定十五部だけ作成した写真集、段ボールを表紙に使いガムテープで背表紙を貼り付け、さらにタイトルはマジックで走り書きという執念の一冊。

これらを含め、紹介されている本の製作依頼者たちは決してプロの作家でも専門家でも無い。知識も経験も無いけれど「自分のために本をつくりたい！」という意欲に燃えている。その熱量を受け止め、印刷屋としてアドバイスをし、共に試行錯誤しながら完成まで二人三脚で走り続けてくれるのが藤原印刷なのだ。

近年、ZINEをはじめとした小規模な自主出版物の人氣が高まっている。誰にも付度せず、商業的な縛りも無く、全力で自分の「好き」を突き詰め形にできる。何でもありの表現方法はどこまでも自由で個性的だ。だからこそ他者を惹きつける魅力があるのだと再確認した。

山



44

三宅唱監督、シム・ウ・ンギョン主演でつげ義春を映画化と聞いて、鼻息を荒くした。これはすごいな！



「海辺の叙景」と「ぼんやり洞のべんさん」どっちも大好きな作品だ。



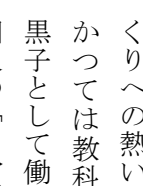
河合優実・高田万作、ロケ地の返浜(かやすはま)によって見事に映像化。



この直後、ひとつの仕掛けがあり(映画を見てのあふれ)冬にパートへ。



雪でかまぐら状になった宿や、べんさんになりきった提真(最初ぼんさん)が、ぶな(じ)も再現度が高い。



本の中にいろんな引き出しを持って、三宅唱監督の今後が楽しみなカケオくんであった。

